

仁科義男は昭和二年五月文部省が発行した「史跡名勝天然記念物」に「甲斐国大月先史遺跡について」と題して明治、大正、昭和の大月遺跡の発掘品について書いている。これと同じ時に出した「桂川沿岸先史民族の遺跡」が私の手元にあるので、その一部をそのまま左に記載する。

その後は、この遺跡が県立都留高等学校の敷地内にあるため、校内のゴミ捨場を作る作業中（昭和三十年四月）にも縄文式土器とその力ヶたが多数発見された。翌年九月には、ほとんど無キズの土器（高さ四十

五センチ）が出土し、仁科義男が調べた結果、約三千年前のもので関東を代表する名器であると新聞に発表した。（下段写真参照）

次に仁科義男の関心が強かつたものに「大丸山古墳」と「大塚古墳」の調査が考えられるが、両古墳については仁科義男の調査資料が非常に多く、その内容の一部は「山梨県の考古学」山本寿々雄著及び「山梨の古代」山梨日日新聞社発刊等に紹介されているので、ここでは読売新聞が仁科義男の話を「古墳発掘で動いた死体」と題して取りあげているので、その概要

を書くことにする。

昭和五年の夏、八月中旬ごろであった。東八代郡左右口村地内の大丸山の古墳を発掘することになり、私はリコックに発掘用具をつめて県の関係者等と汗だくになり大丸山に登った。前方後円式の壮大な古墳を掘り始めたところ、みかけ石の石棺が現われた。

せまい穴から、体をすぼめて降りてゆき石棺の下段にもぐり込んだ。穴から差し込む、うす明りの中で私の目に最初に映つたのは、真つ赤な二筋の物体であつた。すると手前の一つがその時かすかに動き出すではないか。おどろいたね。

「アッ！」と声をあげ、その場から逃げ出そうとしたが、せまい所で身動きがと

れず全身水をあびたようになつて、じつとうずくまつていた。やっと落ち着きをとり戻し、その物体を見るといふと、それは一体の人間の朱染めの骨であった。

その一体が動いたのは気のせいかと思ったが、落着いて考えてみたところ、その日は風が強かつたので入口の穴から吹き込んだ風で動いたのに違ひなかつた。

仁科義男が大塚古墳を発掘調査した頃と今とは、およそ七十五年ほどの月日が経つてゐるので、大塚先生は「あなたが仁科義男さんの息子さんですか？」とも

書いてみた。

仁科義男の研究は、考古学の中心である縄文式土器や弥生式土器、又は古墳の発掘が主なものであったが、これらとは趣を異にするものに富士五湖のうち河口湖、西湖、山中湖の湖底より発見された剣船がある。

これについては、昭和六年に山梨県史跡名勝天然記念物調査委員会より、その年に富士五湖のうち河口湖、西湖、山中湖の湖底より発見された剣船がある。

以上で考古学と共に歩んだ仁科義男の足跡の紹介とする。尚、ここに書けなかったものの全ては、本人の刊行した書籍、雑誌、報告書、その他未発表の原稿として私の手元にあるので、関心のある方は参考にしていただきたい。



無キズの縄文式土器
大月で掘り出される

六、笛子川の合流點
なる大月遺跡

記念物調査委員会
仁科 義男

桂川沿岸先史 民族の遺跡（下）

昭和五年の夏、八月中旬になり大丸山に登つた。前方後円式の壮大な古墳を掘り始めたところ、みかけ石の石棺が現われた。

せまい穴から、体をすぼめて降りてゆき石棺の下段にもぐり込んだ。穴から差し込む、うす明りの中で私の目に最初に映つたのは、真つ赤な二筋の物体であつた。すると手前の一つがその時かすかに動き出すではないか。おどろいたね。

次の「大塚古墳」についても、昭和六年、仁科義男が発行した「山梨県史跡名勝



▲元山梨県立考古学博物館館長 大塚初重先生